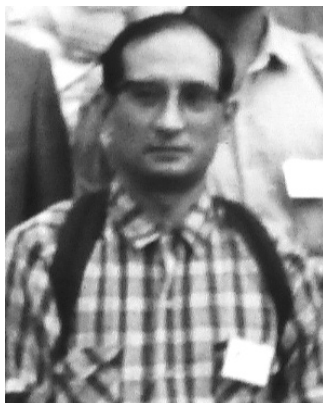


紙碑

鳥類保護活動を下支えした竹下信雄さんの死を悼む



日本鳥学会大会
(1986年東邦大学にて)

長年にわたり日本鳥学会に貢献した竹下信雄さんが2021年6月9日他界された。享年81歳。謹んで哀悼の意を表します。

竹下さんは1975年より18年間にわたり学会評議員・幹事として編集や会計をはじめ会務全般に貢献し、1993年に学会より感謝状が贈呈されている。

竹下さんとは共に幹事を務めてきたとは言え30年～40年も前のこと。当時の記憶はだいぶ薄れてしまった、が、「鳥学ニュース」に掲載された「ある日の幹事会」(1985年3月8日)という彼の一文を見つけた。「……学会の幹事会はほぼ毎月1回のペースで開かれている。場所はいつも唐沢幹事が教諭をつとめる都立両国高校である。夕方6時半から9時前まで。国電錦糸町駅前のラーメン屋か何かで腹ごしらえし……、三三五五集まる。出席率はなかなかよく平均70%を越えるだろう」「3月8日の議題は1ヶ月足らずのうちに開かれる予定の評議員会に各幹事が準備するものの確認と10月に開催予定の長野大会の検討である。また、日本鳥類目録第6版の編集体制づくりに対する幹事会の態度も改めて討議した」とある。学会の会員が600名～700名の時代、例会の案内、大会や評議員会の準備、会計処理、原稿受理・編集・発行、役員の改選・開票作業などを数名の幹事がボランティアで支えた時代が懐かしく思い出される。その中心人物の一人が竹下さんであった。

穏やかで物静か、彫りの深い端整な顔立ちと相まって「都会育ちの知識人」というのが竹下さんの第一印象であった。竹下さんがいるだけで幹事会は和み安心するところがあった。学会70年記念行事の中心となり、仙台大会、長野大会など現地と東京(事務局)のパイプ役を背負っていたと記憶する。

鳥学会役員を退いた後、竹下さんとの親交はしばらく途絶えていたが、突然

の訃報に接し、竹下さんを知る多くの知人、友人、同志の諸氏から惜別の思いが寄せられると共に彼が取り組んできた鳥類保護や自然保護活動について多くの情報をご教示いただくこととなった。

竹下さんの生涯にわたる鳥類保護活動の中から、以下の三点を紹介したい。

活動の第一は、鳥学会幹事に就く前の日本野鳥の会事務局時代(1970～78)に始まる。事務局長として中西悟堂会長を支え、カスミ網による密猟反対運動や東京湾(葛西)の埋め立て問題などに取り組み、当時の林野庁、環境庁との交渉にあたった。中西会長を補佐していた当時を回想した「会頭の資格」(『悟堂追憶』1990)には、日本野鳥の会時代の竹下さんの心の内が述べられている。また、日本野鳥の会の財団法人化にあたり、事務局長として竹下さんの手腕が発揮されたことは言うまでもないであろう。

活動の第二は 1970 年代に数羽にまで減少したシジュウカラガンの保護復活への支援である。

呉地正行さん(日本雁を保護する会会長)によれば、「会は 1970 年に発足。当時、日本野鳥の会事務局長だった竹下さんの支援もあり、野鳥誌に雁の記事を掲載。全国からガン類の情報が収集できた」「当時狩猟鳥だったマガン、ヒシクイの狩猟鳥からの除外を求める請願のために雁を保護する会が集めた署名のとりまとめを竹下さんに担っていただいた」「日本雁を保護する会の顧問を長らく務め、その活動を支援し、特に中央(東京)関連の活動については、その中核となり、呉地らが上京したときは、自宅を活動拠点として提供していただいた」等々、当時を振りかえる。

2021 年 11 月、『シジュウカラガン物語』(呉地正行・須川恒編)が出版された。絶滅の淵からふたたび日本の空によみがえることになった長い道のりの物語とその記録である。著書によれば、長い道のりの中で「第 12 回ガンのシンポジウム」(1996 年開催)はガンと農業の共生をめざす「蕪栗沼宣言」が採択された重要な会議の一つとなった。そのシンポジウムで司会を務めマイクを握る竹下さんのありし日の姿が記録として掲載されている。出版を見ずに他界したことはいかにも残念である。

ガン類の保護は気候変動とも関係している。竹下さんは堂本暁子議員(のち千葉県知事)らが主宰する生物多様性 Japan のメンバーとして深く関わった。気候変動枠組条約 COP3 が京都で開催され、京都議定書が採択された 1997 年に生物多様性 Japan の尽力で出版された『温暖化に迫られる生き物たち』(築地書館)では、気候変動に伴う鳥類への影響に関して「鳥に何か起こるか」と題して、マガンの越冬生態の変化、高山鳥(ライチョウ、イワヒバリ)への影響、海面上昇による干潟消失が渡り鳥に与える影響などについて執筆、鳥たちの未来に警鐘を鳴らしている。病みゆく地球環境から鳥類を守るとは、延いては人々の生命と尊厳を守ることにも繋がるというヒューマニズムに根ざした竹下さんの人生観が垣間見られる。

竹下さんの第三の活動は「鉛弾狩猟による鳥類の鉛中毒」への取り組みである。

中村桂子さん(全国野鳥密猟対策連絡会事務局長)からお送りいただいた膨大な資料によれば、竹下さんは鉛弾規制同盟・雁を保護する会の立場から、省庁への働きかけや関係団体との調整を精力的に行うなどして宮城県での「鉛弾の全面禁止」(2002年6月6日河北新聞)、「クレー射撃の鉛弾禁止」(2004年7月7日読売新聞解説記事)などへの道を切り拓くこととなった。

さらに堂本議員や環境省に働きかけ、北海道での鉛弾規制が実現した。また竹下さんらの活動は「2025年より全国的な鉛弾規制」(2021年9月10日閣議決定)へと繋がり実を結ぶこととなった。堂本議員の政策秘書であった川道美枝子さんは「竹下さんと堂本議員の結びつきによって多くの生物が救われた。6月に竹下さんが亡くなられ、この朗報が聞けなかったことが残念です」と感慨する。

一方で竹下さんの本業は著述業であり、その一例が別冊日経サイエンス277(Scientific American 日本版)『鳥のサイエンス』(2018)で「卵を産めない鳥ヤブツカツクリ」(原題名 The Brush Turkey)や「カッコウと宿主の相互進化」(原題名 Coevolution of the Cuckoo and Its Host)などの日本語翻訳である。また、『まち中のバードウォッチング』(小学館1985年)や『野鳥カタログ』(永岡書店1994)、百科事典などの執筆を手がけ野鳥観察の普及にも務めた。

竹下さんは1940年東京生れ。両親共にクリスチャンの長男として幼少のころに洗礼を受ける。父親は総務省政務次官。学術会議事務局長などを歴任し湯川秀樹教授や朝永振一郎教授らのノーベル章受賞の交渉に携わった。そうしたご縁もありお正月には両教授らのご自宅に出入りする、そんな家庭で幼児期を育った。日本鳥学会や日本野鳥の会の組織を支え、様々な鳥類の保護活動を下支えた手腕は父親譲りのDNAに由来したものであろう。

自然と野生生物をこよなく愛し、深く思索し、その保護活動を支援した。その純粋な奉仕の精神の根底にキリスト教への信仰があったことは間違いあるまい。今や遠いところから日本鳥学会、日本野鳥の会、日本雁を保護する会など様々な活動を見守りつつ、カトリック府中墓地にて永眠している。

唐沢孝一
(都市鳥研究会顧問)